

明柳雜誌

第一卷第六號



近作

句になる迄(三)

麻生路郎(九)

新和歌の浦吟行

遅日莊主人(二四)

彈力ある句を望む

淡輪號生(七)

川柳書架(三)

竹内多聞(一九)

近作柳樽

路選(二)

募橋詰

篠原春雨選(一六)

集奉公

柳川洲馬
龜井花童子 共選(一六)

本社六月例会

啞人記(二〇) 第十二支部例会

花童子記(一三)

神戸奉祝三人吟

かほる居偶會(三)

川柳塔

(一〇)

古城山、蘆穂、二柳子、零骨、莢豆、雅幽、柳路、一洲、かほる、助六、輝峯、
葭乃、徹底郎、啞人

編輯室

加藤靜見(三)

筏(表紙畫自刻)

柴谷柴舟

夏の日(扉)

加藤靜見

川柳涼舟

岡田三面子(六)
西原柳雨

川柳雜誌

第一號 第六卷



電線のたるむ燕の二三匹
 客はもう茶漬を所望するのなり
 小町だま云つても居れぬ新世帯
 双方で悔みがすめばいゝ噂
 曲乗りが出来て配達断られ
 八百長の角力士俵を破つたッけ
 團體をそれて廓の灯は近し
 宣傳のピラ塀筋ごみさなり
 吠られて船の陰から二人立ち
 喰物をあれかこれかき變へました
 嘘にしる満更悪くない話

神戸 琴月
 同 同
 大阪 柳化坊
 同 同
 神戸 南耕
 同 同
 神島 眠聲
 同 同
 魚崎 チャリボ
 岡山 村夫
 堺 夢六

編上げを仲居ステツキ持つて待ち
 舌打ちの丁稚一品付け落し
 荷車の後を巡査が押てるる
 喜びの顔に母だけ涙が出る
 人山をのこしてかはる法界屋
 出し抜けの客に茶漬は冷るなり
 奥様ご呼ばれて二人返事をし
 親類が辨償をして辭職させ
 國の親來て異見聞く涼み臺
 二階借小金をためる氣で暮し
 今日限り荷物の用事出来て居り

大阪 乾坤
 神戸 一閑子
 大阪 山月
 平塚 美濃守
 大阪 猪太郎
 岐阜 暮朗
 尼崎 瀧草
 大阪 蚊十
 同 薫流
 同 千代二
 神戸 久太郎

暑中廣告を募る

八月十五日發行の本誌へ柳友交誼の暑中見舞廣告を募ります。川柳社ならびに川柳家のため特に左記の特價で本誌の一部を割愛いたします。

一頁 八圓

半頁 五圓

十分の一頁 壹圓

十分の一頁に限り住所氏名雅號に止められたし、若し句を載せる場合は一句に限ること。

申込期限七月二十七日

ですが、なるべく早く廣告原稿を送られたし。廣告料金は申込と同時に送りを願ひます。

本社廣告係宛



川柳涼舟

岡田三面子
西原柳雨
合編

句の末に示す年代の符號、明は明和、安は安永、天は天明、寛は寛政、化は文化、政は文政、保は天保

江戸時代では毎年五月廿八日から八月廿八日まで三月の間涼舟を出す事を許されて居た。であるから其季節には風雨なその障りの無い限り連夜大川筋に浮かぶ大小無數の屋形やニタリの紅燈の影は水に揺られ絃歌の聲を波に漂ひその壯觀他に比すべきものが無かつたのである。特に其第一日は所謂川開きで兩國橋畔玉屋、躰屋の打揚げる花火に橋上は人を以て滿たされ、橋下は船を以て蔽はれるの盛況、其頃多くの僚船を壓して水上の女王の如く仰がれた最大最美の屋形船の名を吉野丸といひ川丸なきは第二位であつた。

川一は吉野へ對し慮外な名 (明)

の句は此事實を咏んだのである。

吉野丸これほくろ酒落て乗り
大きな涼み花の山を泛べ (明)
二ヶ國へ一艘浮かむ吉野丸 (天)
なご何れも其評判の高かつたこごが分る。 (化)

轅竿五六本さすい、涼み (天)
い、涼み四五人屋根を駈ツくら (安)
屋根の上ガタツピする、涼み (天)
い、涼み天窓の上を歩かせる (安)
船頭の足音を聞くい、涼み (寛)
吉野丸のやうな大きな屋形になれば皆船頭が屋根の上から長い棹をさして上下したのである。

船で暑さを捨に出る國境 (化)
風なりに羽織を疊む舟遊山 (化)

下總へ音締の響くいゝ涼み (化)

屋根で竹引する下で踊つて (天)

國境は言ふまでもなく武總の間を流れる大川、その風に逆ら

はず羽織を疊むこはいかにも涼しそう。屋根の上では船頭が棹

さす、其下では踊つて居るさいふので大きさが想像される。そ

のドンチャン騒ぎを見やうと艀寄せる数多の小船

けちな舟遊山吉野を探して (安)

小船でおつこりまはす花の山 (安)

弾止む吉野のグリ川となり (安)

この末の句で見るこ、藝盡してもやつて居る間は吉野の周圍

は小舟で押つ取巻き水も見へぬほぎであつたらしい。

屋形から人ご思はぬ橋の上 (明)

欄干に人を生らせるいゝ涼み (安)

下を見て奢る氣になる橋涼み (保)

いかにも馳奢を銜ふその時代のブルジョア氣分がよく現れた

居る。餅一茶が『下見れば方圖がないぞ涼み舟』と洒落れた

のも此狀況を指たのである。

いゝ降りだなきゝ屋形で憎い口 (安)

屋根船で高慢を云ふ俄雨 (安)

夏の空の定めなく、スワタ立ミ右往左往に立騒ぐ橋上の混雑
を却て面白がるこは續に降るが仕方がない。但し屋根船さいふ

分は小舟に板を以てホンの申譯ほぎの屋根があらきりで立つて
歩かれぬ高さであるから (政)

屋根船でウツカリ立つて天窓餅 (政)

尻餅もなく天窓餅がコツン

屋根船の提燈顔の中へ下け (安)

口ミ手ミ計り屋根船騒ぐなり (安)

舟で酒體を固めて丁ミ受け (安)

到底糸に合せて立つて舞ふここなぞは出来ぬ

吸物を出すで屋根船其けぶさ (安)

繰引のやうに屋根船膳を出し (安)

船先の七輪でサンザ簾菜をいぶらせ、ヤット出来た膳立を手か

ら手へ渡すのも戦々競々。そこへ行くミ吉野丸なぞになれば

屋形にも捨假名のつく料理舟 (明)

チャント別に料理をする小舟がついて居たのである。藝事の間

ヒシ／＼と取巻いて居たが

吉野丸吸物が出て舟が散り (寛)

まさか喰べ物まで見ては居らぬ。屋根船、屋形船の外に水菓子

や酒肴を賣るウロ／＼船、又は影芝居、聲色遣ひの船なきが混

ぶつて

船の藝向ふ三軒出来るなり (天)

は分るが、猿廻しまで來たミ見へ

猿廻し吉野を三度廻るなり (天)
 舟の猿象牙の撥で招かれる (安)
 吉野から猿に水瓜を投げて遣り (安)
 さいふ句がある。

あまつげを持せて藝者船へ来る (安)
 オット来たなき、三味線船へ取 (政)
 美しい押掛の来る吉野丸 (安)
 駒下駄を錯の側に脱ぎ散らし (安)
 ツウイノ、歩橋を渡り藝者乗 (寛)
 あぶなくもないに船頭抱たがり (化)
 船頭もあこの婆アは義理で抱き (明)

右の中、あまつげは刀なきを入れた箱で三味線箱をそれに見立てた句、美しい押掛は口を掛けない藝者まで姉さんか知合の客かに尾いて来たことも、たゞの知合の娘の押掛客も取れる、最後の句は普通の渡場の風情にも解せられ、其時代、橋町に住んで居て踊り子と呼ばれた轉び藝者には何時もそのお袋が附添つて居たからその婆アも解せられる。

吉野丸 橋町を根 (明)
 船の名を書いて踊子呼 (天)
 櫛を押へ屋根船 (安)
 振袖のマ者も出る船時分 (安)
 橋町には大阪屋平六さいふ其頃有名な薬屋があつたから踊子

なごも鬪香は大平で買つたであらう。一體踊子なるものは幾歳になつても必ず振袖を着て、何時も十八九の娘姿で押つ通したのであるが、納涼の季節なきには俄に三十振袖のマヤカシ踊子の附廻しが續々現はれたらしい、然し

橋杭を撥で、一、二、三、四なり (安)
 は本當に若い藝者であらう。花火に付いては
 玉三、鍵、口ミ尻ミで眺み合ひ (化)
 玉屋は吉川町、鍵屋は横山町に住み裏口ミ表口ミが向合せに成つて居ることは此句の通りであるが玉屋の方が評判よく
 不出来なはんな鍵屋へおつかや (安) 又玉屋だるまは鍵屋いり (化)
 なぎの句がある。

二ヶ國のうもほひな、花火 (寛) 兩國の分野流星落るなり (天)
 然るに天保十四年五月十七日十一代將軍家齊日光社參の當日火を失した科に因り取拂を命ぜられ
 鍵斗りいなりで玉は紛失し (保)
 鍵屋の獨舞臺になつたこともある。打揚げも仕掛けも數々あつた後、

是切りの口上火繩振つて見せ (政)
 提灯での、字を書くミ人が散り (化)
 提灯を礎して只の橋にする (化)
 そこここ此話もお仕舞。 (畢)

近作

麻生路郎

電車賃もないは無心哀れなり
借りる氣で行けば有馬の夏も聞
金ためてさうする氣かミ椽の端
腕次第ですミ内職聞かされる
小使ひが切れて歩いて來たミいふ
風邪ひいてそれきり來ない私消者
それも束の間三越を遠ざかり
豪所靴を磨いたかミきかれ
白靴を妾は軽うつまみあけ
童貞が弱蟲ミいふ名を買ひ

本社六月例會

於十四日夜
於端の坊

むし暑い夜だつた。が、久し振りに句會へ出たので、かなり緊張した氣持になれた。同人の多數が差支へたのは甚だ遺憾であつたが路郎、日車、五葉、水府、溪花坊、諸先輩が揃つて顔を見せられたので満足した。(啞人生)

鳥籠(兼題) 路郎 選

鳥籠の世話もする氣の病上り 津々
鳥籠を修理して居る釜ヶ崎 廣賀
妾宅へばかり鳥籠吊らすなり 馬行
診察の順を鸚鵡の籠で待ち 輝翠
鳥籠へ隠居 値打を人ねて去に 零骨
鳥籠へ向いて宗匠 咳をすら 松郎
鳥籠の掃除に家形もめが 出来 蝶二
鳥籠もあつて静かな暮しなり 梅風
鳥籠の側を動かぬ病 上り 天海
鳥籠の片手今来た手紙もち 波郎
鳥籠を持つて日あたり考へる 同
鳥籠が窓から見ゆる文化村 進午
鳥籠がピアノの上で躍りさう 同

鳥籠が障子にうつる麗かさ 同
鳥籠の羽の綺麗さ 見せるだけ 溪花坊
鳥籠の粟が障子の敷に飛び 同
鳥籠をはるかに聲をきく暮らし 同
鳥籠の値段鳥屋は手を止めず 五葉
所在なき鳥籠の蓋上げてみる 同
鳥籠を落したらしい縁の音 同
鳥籠も淋しき日あり小鳥の死 日車
家廣く小鳥も籠に棲み古し 同
鳥籠の障子に寒い日脚也 同

○
鳥籠の鳥は夕立寒う見る 路郎
鐵橋(席題) 五葉 選
鐵橋に雨がかかかてよく光り 津々

鐵橋で乞食冷たく座つて居 廣賀
汽車書いてやれば鐵橋書かさ かほる
鐵橋に又新しい涙なり 双柳
鐵橋へ寒月寒く照らすなり 柳骨
鐵橋へ来た一行に腹が空き 助六
鐵橋を過ぎる三小な停車場 駒人
鐵橋へかゝる頃から日が暮る 同
朝顔の蔓の鐵橋へさゞきかけ 刀三
鐵橋へ一番汽車の通る音 同
鐵橋を目あてに村を教へられ しける
鐵橋の下にきれいな花の群 同
鐵橋から引返して居る養蜂 松郎
鐵橋へ来て斥候はひだるがり 同
鐵橋で男の方は覗くなり 啞人
鐵橋で繪になりさうな雲を見る 同
鐵橋にきつい流れの水を見る 輝翠
鐵橋に沿ふて薬家の煙が立ち 同
鐵橋に放られたやうな工夫居る 蝶二
鐵橋に家出はふつ三首を出し 同
鐵橋の中途で歸る四つん這ひ 同
鐵橋の端ミ端ミがちがふ國 溪花坊

船頭は今過ぐ汽車の裏を見る
同

八 傑

鐵橋の脚に水の潮變るなり
溪花坊

鐵橋の響で散つた櫻なり
路郎

鐵橋の向ふに長い橋が見え
かほる

鐵橋をまつすぐに見る山の上
同

鐵橋でなくなるらしい音になり
輝翠

鐵橋で芝居が過るロケーション
蝶二

鐵橋へ出て来て派手な煙を吐
刀三

鐵橋で朝日小さく拜むなり
路郎

鐵橋の下
人

鐵橋の下の芒にゑらい風
松郎

鐵橋の下で裸體の子がはたへ
波郎

鐵橋の中へ小さい汽車になり
日車

軸

鐵橋に二等車の中靜なり
五葉

報知機(席題) 溪花坊選

報知機へ大きな火の子飛々来る
かほる

報知機へ来た噴火の手もう上り
輝翠

こもかくも報知機迄を急ぐなり
しける

お見舞に行き報知機見てかへり
進午

報知機を夜鳴き淋ゆ見て通り
刀三

新報知機こにも出来て居り
廣賀

報知機が出来て半鐘遠くき
柳骨

水溜り越つて報知機見かへられ
波郎

報知機の向ふはちがふ町となり
同

報知機に二臺のボンブだまさ
蝶二

報知機へ違つた噂殖つて来る
同

此先の小火に報知機使はれる
駒人

報知機で電話が掛かる消防署
同

報知機は寧ろ他人がひき廻し
日車

報知機で空しく歸る驢がしき
同

報知機は漫講にするよかりき
五葉

報知機を見て口元でチト笑ひ
同

報知機が鳴つておいでたき消防
松郎

報知機にするる夕刊屋の帽子
同

報知機へゑらいほこりの夏となり
同

石 疊(席題) 互 選

石疊蚯蚓の頭ちつみ見ぬ
溪花坊

石疊洗ふたきこに犬が来る
廣賀

石疊昔のまゝの舊家なり
波郎

こわれ物しつかり持つた石疊
駒人

女連れからけを下ける石疊
蝶二

石疊車の音もほつこする
同

石疊亭主の茶碗割る所
双柳

石疊だけが残つた火事の跡
同

石疊いんま洗ふたきこへ容
しける

芋蟲が一つ落てる石疊
同

石疊利久の音が高くなり
かほる

石疊こゝも蒲鉾形にへり
同

石疊つまづく程も酔ふて居ず
助六

石疊だけを歩いた新の下駄
同

森閑として石疊長過ぎる
啞人

石疊牡丹の花は盛りなり
同

俄雨きれいになつた石疊
柳骨

石疊路次を出るまで音をたて
同

石疊養子雪駄で戻つて来
刀三



句になる迄 (三)

— 添削改作句稿より —

遅 日 莊 主 人

- (一) 氷屋の灯は暗い 美代子
 - (二) 兄は御飯も喰はず野球をし 同
 - (三) 水道へ白いお手々が集つた 同
 - (四) 縄飛ぶ屹度男の子が邪魔し 同
 - (五) いらつしやい子をさぞくいたししよ 同
 - (六) 赤組の先生はさきと吐る 同
 - (七) クレオンで兄さんや書き 同
 - (八) もう私男の子は遊ばない 同
 - (九) あこれ南京虫が噛たのよ 同
- 美代子さんは十一才の少女ですが川柳家を叔父さんに持つてゐるだけに、なかく皮肉な句を作る。
- こゝに載せた句は美代子さんの近作です。添削も改作も取捨もせずに全部載せて見た。如何にも子供供らしさが句の上に見えてゐて面白と思つた。

- (三) は女の子の悪戯がよくうけ取れる
 - (四) は女の子の小さな不平が、この一句に流れてゐる。(五) は童謡の境地から抜けて出たやうな句であり。(六) は(四)と同じで常に作者の頭の中にわだかまつてゐた小さな不平が川柳の形式を藉りて飛び出したものさ見るこゝが出来る。(七)はこの作者が全く川柳的の頭になつてゐるこゝを證據たゞゝゐる。
 - (八)の句は到底大人の作れない句である。(九)は作者が神戸だけに南京虫を捕へて句にしたところ興趣が深い。
- 句作とらば女房の顔つき 月の輪
原句は「句作する時女房の顔つき」であつたが、それでは女房が句作してゐるこゝが考へられぬ。それでは川柳にはな

らぬ。作者の意思では亭主が、いかにも間の抜けた面構へで句作してゐるのを傍から眺めて一種の侮蔑ははれみこを投かけて、さも呆れたこいふ女房の顔つきに皮肉を感じて詠んだ句であらうと思ふ。さうだこゝするこ前掲の如く添削しなければ作者の句意を諒解することは出来ない。

繡帯を巻いてる指は空を 月の輪
これも同じ作者の句であるが、これは考へ過ぎて失敗した句である。大いに穿つた句を作つてやらうなごこ考へてゐるここんな句になつてしまふものである。この作者の句では「無量寺の庵主背中を見つ暮し」なきが輕妙である。

漂流者雲の向ふに生きん 寸馬
原句は「一沫の雲に望みを漂流者」であつたが、これでは力が足りない。人生に對する執着を今少し力強く表現しなければ、此句には生命がない。そこで表現の仕方を前掲の如くに變へて見たのである

募

集

句

橋 詰

篠原春雨選

橋詰で一列になる假普請 馬行
 橋詰で太鼓をやめる東西屋 暮期
 橋詰の柳思案の場所に立ち 寸馬
 橋詰の家はお城のやうに建ち 是々坊
 橋詰へ立つて監督邪魔がられ 一柳
 橋詰へ来て蠟船にさめるなり 劍二郎
 橋詰で謔定書を出して見る 徹底郎
 橋詰で待つ約束をして歸り 伯洲
 橋詰の巡査芋屋と顔馴染 蚊十
 橋詰を下ろし蠟船への橋 月の輪
 橋詰で見た事のある人に會ひ 久太郎
 橋詰で旦那らしいが待つて居り 駒人
 橋詰はエブロンかんで泣く所 双柳
 橋詰を按摩見わたる際に折れ 廣賀
 橋詰で印押纏ピラを撒き 不越
 橋詰を約して二人そつこ出る 松雨

橋詰で一人は急に氣がかはり 波路
 橋詰へ追つかけて来る忘れ物 琴月
 橋詰のこんな所に曖昧屋 彌生
 橋詰に巡査のいかめしい顔 村夫
 橋詰の茶店へ手守借りが出来 不老庵
 東西屋橋詰へ来てすいつける 柳骨
 何忘れたか橋詰で引返し 光太樓
 橋詰へ来て團體は後を見る 柳路
 橋詰へ来る火の手は遠くなり 雅幽
 橋詰に丸福さいふ暖簾なり 一洲
 橋詰のバラック江戸の氣味が 盜泉
 橋詰へ来て荷車は梶をかね 百石
 橋詰へ来る三方角思ひ出し 南耕
 橋詰で荷馬車の音が變るなり 一休
 橋詰に高張があるゆうべの火事 政次
 橋詰を何處かのバレルの二人連れ 柳化坊

川柳書架

(三)

誹風柳樽通釋

初篇

(武笠山椒著)

著者は、かつて有朋堂文庫の新撰川柳狂詩集の選をされた武笠山椒氏である。本書の巻頭に「此の本を讀んで下さる方々へ」さいふ一文が載せてあるから例によつて轉載して見やう。

此の本を讀んで下さる方々へ
 一、此の柳樽初篇通釋は、私の川柳研究のはじめての手習ひ草紙です。これを出來上つてゐるものだなどとは、毛頭思つては居りません。讀んで下さる方々の御教へによつて、段々に完全なものになつて行くことを、著者は切に願つて居ります。
 二、今までの柳樽の句の註釋は大抵斷片的で、全體を小口から平押しに行つたものは、まだ無いやうです。私は之

兵隊の様に奉公人並べ馬行
 好いてする奉公不平なく務め
 角帯を締めて涙かほろり落ち一洲
 藪人にちよやせてる、母は聞き
 近頃の奉公人はご趣味なり
 奉公人親の便りを床で読み
 奉公に出したを母は口惜がり
 奉公に千日前の明る過ぎ
 長男は奉公もせず嫁をさり
 奉公をしてもつ親の慈悲を知り
 奉公のちみ恥しい人に會ひ
 奉公人らしく羽織が長すぎる
 奉公の先迄親父無心に来
 奉公を務め終つて年増なり
 奉公人頓着なしに飯を喰ひ
 奉公に馴れて主人を又替る
 奉公に出て眠い朝續くなり
 奉公に文字の通りならぬなり
 奉公もさせては置けん年こなり
 初奉公叔母が手引でつれて行き
 店先に初奉公の手をかさね

馬行 輝翠 一洲 竹榮 蚊十 薰流 茂太 伯洲 駒人 彌生 乾坤 是々坊 呑氣坊 琴月 小人 凡人 光太樓 村夫 夢六 少女櫻 盜泉

初奉公母の手になるものを着ひ
 順々に奉公に出る子澤山
 出奉公段々辛いことが殖ね
 奉公が厭氣になつて年を取り
 奉公の一人く親があり
 早くさむ飯に奉公まだ馴れず
 奉公に持て来た着物儼が生ね
 奉公をした事もある親且那
 立志傳の様にはゆかず人の飯
 初奉公口數多い女親
 審持つ事から奉公教へらら

三拍子 二三吉 同 柳化坊 同 一休 同 久樂 同 月の輪 同 廣賀 不越 百石 三拍子 盜泉 寸馬 馬行

五 容

奉公に來て二三日遊ぶなり
 奉公人理屈を云ふて断られ
 奉公をして出戻りは時機を待ち
 買藥だけで寝かせる奉公人
 奉公人根性で膳に向ひ合ひ
 奉公の子はうなづいてばかり
 奉公の一步またけば悪く云ひ
 天 地 人

た。
 七、装釘の意匠を見かへしの講は、英
 朋講伯が、特に著者の爲めに思ひを凝
 して下されたものです。
 大正十二年十二月 山椒生
 としてある。
 ▲次に目次を列挙するに
 納井川柳翁肖像、此の本を讀んで下さ
 る方々へ、挿講目次、原序、本文、追
 記八條、首句索引、註釋索引。
 ▼大正十三年六月十三日發行。四六版四
 四七頁。定價參圓。東京市神田區錦町一
 丁目十九番地有朋堂書店發行。
 ▼誹風柳樽の通釋といふことは、仲々の
 大事業である。たゞへ初篇だけでも通釋
 書が出たことは川柳家にまつては誠によ
 ろこばしいことである。私は未だ通讀は
 してゐないが初篇の句が果して全部載せ
 てあるか、さうかを引合はして見た。柳
 樽は御承知の如く異本があるので、その
 配列の順は、あちこちで飛んではゐるが
 削除された句以外に二三相違を發見した
 に過ぎなかつた。

使はれて居る眼に大きい臺所輝翠

角帯びが初奉公に締過ぎ洲馬

◇ 花童子選

角袖で兄貴が戻る公休日助六

奉公からのつきりませて歸つ來馬行

借金に姉が奉公して拂ひ蚊十

組合に表彰されて命をこり月の輪

奉公の暇に讀んでる講義録二三吉

奉公の兄へ着替へを持つて來る同

親戚が通るのを見る奉公人暮朗

奉公人らしく羽織が長すぎる是々坊

奉公の當座は國の夢ばかり琴月

暇をつた奉公人の事をはの夢六

奉公のちこ恥しい人に逢ひ乾坤

奉公を止めたい程に金が出来柳骨

新人の丁稚三人使ひに出光太樓

御主人はおなじ國の人であり同

秀逸

奉公に千日前の明るすぎ伯洲
奉公に出て友達を戀しがり光太樓

奉公に行くのへ母の別な金同人

店先に初奉公の手をかさね盗泉

奉公の辛さ臍の木戸で泣き一閑子

天

初奉公母の手になるものを着け三拍子

◇

拂底を楯に帳場の晝寝なり花童子

本社七月例会

十九日午後六時より

時

大阪市南區清水町
島之内警察署前

端の坊にて

所

題

「風」五句 路郎選

費 貳拾錢

初心者の來會を歓迎いたします。

▼飛び／＼に讀んだ丈ではあるが、中々よく調べてある。殊に、その當時の事情を明かにする爲に名所圖繪其他から多數の挿繪を轉載された勞を感謝したい。

▼この本の著者は、單なる著述家の仕事でなくて、何處までも研究的態度を採つてゐられるのは愉快である。追記八條にある伊東靜丸氏の意見の中に常識的判斷を下して反つて間違つてゐる項を發見したが何れ精讀した上で、著者へお知らせしたいと思つてゐる。

▼川柳書架は、單にぎんな本であるかを知らず止め、殆ど批評を加へずに執筆して來たのであるが、本書は最新刊でもあり、しかも従來の註釋本より、より完璧に近いものである嬉しさに、特にこれだけを記すことにした。

▼この稿を書いてから後に知つたのであるが著者は文部省の圖書課長ださうである。

弾力ある句を望む

竹内多聞

かなりいろいろな投稿があるが、あまり面白いものに、ぶつつからぬ。竹内多聞君の「弾力ある句を望む」はそれ等の投稿中から抜いたものである。私達は出来る限る若い人達の言にききたいと思つてゐるのであるから面白いものが書けたら見せて貰ひたい。(A)

私は常に弾力のある句を望んで居るものであります。一句を通じて弾力あり、しかも緊張味の備はつてゐる句であらうことを望むのであります。私の言ふ緊張味とは句の内容のみを力説するものではない。内容のみ引き緊つた句は、格言や諺の様なものになつてしまふもので特に聲を大きくして言ひたいのは表現法に弾力を有することに、此處に川柳の生命は藏されては居ないか。私は縁日で大道商人が賣つてゐる玩具に龜山のチョンベな

るものを見る。それは竹細工のハジキになつてゐるのであるが、今その玩具に仕掛けを施して稍々暫くの時をまつていきなり跳上るありさま、此の玩具龜山のチョンベなるものは既にはじき返して跳躍した時は此のものゝ本領は半減されてゐる。跳り上る前にいさゝかの豫備がある、今か今か三片唾を飲むタイムを有してゐる。その時の玩具の顔がジツと見ると宛かも血の通ねるものゝごく得もいはれぬ興趣を有してゐる。此の僅かの瞬間、つまり張りつめたユーモア夫れが彼れの面白さであつて人の好んで求める點である。此れ三川柳も同じふしてはせぬか三何時も思ふ。内容に於て表現に於て全部赤裸々に並べられては餘程の佳味珍奇に非ざれば着をさる氣がせぬ。霞を隔てゝ山を見る處に津々々起つて來る

興趣が存するのではなからふか。表現の方法は特に川柳には重大な條件の一つであることは誰しも云つてゐる事なのである。斯道の大家なりと雖もそうそうに非凡な着想のみを捉ふるものではない。平凡なものを見ても云ひ現し方に技巧をこらすをもつて句が生て來ると思ふ。技巧さいわば少しく難ぜらるゝ點も無いでもないが要するに同じ事柄でも生て動くものゝ立派な着想を得ながら用ひ方の當を得ざるが爲に角の收獲を殺してしまはねばならぬ事がある。これ等は實際考ねて見ると惜しい次第である。本月號の句で例を上げて見るに、紋太子の句で
鼻先へ嘘々々の指が來る
實にうまい。其の場面が此の句の中に充分味はゝれて而も赤裸々にその内面をさげ出してゐない。
盃は先づ旦那から旦那から 東洋鬼
此句にしても二度目の「旦那から」の重復辭句をさりもつた處に川柳味が溢れて



川柳塔

高橋古城山

落付いて持つ盃に灯が映り
 悪戯な氣で取り寄せた硯箱
 自惚ミ許り思へぬ事を聞き
 若い氣が出たでは濟まぬ旅の宿
 主人へは挨拶だけの妻の友
 此灸が利いたミ女將肌を見せ
 水蜜桃が一ツ残つた冷蔵庫
 櫻桃舌で結べるほき遊び
 草臥れて戻る夕日の赤いこ
 色ざんげ前口上が長過ぎる
 本當に惚れてゐるのは遠く座し

はるないだらふか。

獨り者碎ける様に米をこぎ 句樂

碎ける様にこいふた表現法に此の句は一層力を付けてゐる。この様に何ふしても川柳は表現の法に於て何かまだ次が出て来る様な感を持たせる事は最も必要と思ふ。何時か前の時の句で水府さんの句かと思ひますが

立喰は二人菜種の方を向き

さかいふ句は私の頭から去らない。此れ等の句にして菜種といふものが飛出している處に何ともいねぬ趣きがある。又

有名の人を罵る二階借り

此の句も忘れられぬ句の中の一つですが『有名の』といふ三字が川柳味をたつぷりこみ含んでゐることに氣が附く。實際こゝうして見れば川柳には佻しい内の滑稽・悲しみの中の洒脱・逆も他のものをもつて知るここの出来ぬ強さをもつてゐる。鬼手佛心といはうか、荒削りの大木から羽蟻が飛び出した様な境地を川柳は具

脇息の誰か起して呉れる筈
無心云ふ女であると思はざる
母親は眞顔で少し惚氣られ
本當に痛かつたので舞妓泣き

竹田 蘆穂

よく似合ひます番頭迷はせる
鮮人の髭は生れたまゝらしい
掛取へきつちり座る情けなさ
小賣せぬ店で見せてる暖簾
ストライキ巡査皮肉なニコへ立ち
高島田蠅取紙を注意され
詰襟を無造作に着た代表者
○ 橋本二柳子

雑談を課長が消して廻るなり
追ひつめた様に丁稚は掃よせる
地下室へ来る晝寝がしたくなり
掛取を空しく歸へす金を出し
掛取は見直して門潜るなり

して憚らぬ。序ですからいひ度いのは川柳にも川柳の常套語といふものがある。例へば何々が景になりとか何するやふにとか、何々してるとかイッチとか、何々してしまひとか此れ等の語は既に古いから使用せぬといふ事なしに何時のまきでも適所に使用して前後の意をより強く案配することは必要であらうと思ふ。又其の處の名を附けたなりでその本来のものを思はせる場合がよく見つけられる。例へば寶塚だとか女學校だとか一學年(一年生よりも一學年の方が柳味がある)その前凡て事物の何たるを問はずガミ(ミ頭から噛みついて碎いて行處に川柳の面白ところがある。今一つ終りに述べたい事は今までの川柳作家の句を見ても主として人情風俗等の人事のみを取扱つてゐた。生活即ち川柳であつた。それだけ川柳は肺腑をつくに毒剣であつた。而し川柳は川柳として今まで通り世相の變轉に悟して吠てゐた

何も彼も神にまかせさきかされる
寓だけで郵便屋ちさ困る也

○ 天の橋立 (二句)

股のぞき女がするさ可笑がり
生た鯛に四五人たかる宮津灣

○ 酒井 零骨

蚊取粉へ母は焼香染みてる
寛いだ涼みに父は帯もせず
慰めてやれば又泣く女の子
せぬ帯へ母さんくくの愚知を云ひ
散歩して来いさは客の手前なり
鉢巻ではたいいた足の砂埃
びっしやり閉めて異見をする氣なり
ほろくさして小兒科の扉をあけ
本意なくかへすは先で添ふ氣なり

○ 黒木 莢豆

帆柱がかさなり合つて流れ出し
きりくすうたねをして子を捕られ

ならそれで充分かさいねばそふではない
こ私はいふ。天地玄黄新羅萬象あらゆるものに川柳の生命たる皮肉さ洒脱さをぶつけてかゝらぬものはないと思ふ。
丁度濛々湯氣の騰つてゐるライスにドロットカレーをかけるが如く川柳をもつて征服することは譯の無いことだ。自然を捉へて句にし鳥獸虫にいたるまで川柳化した事ならまだく澤山開拓する餘地はある。それが人間に與へる程の皮肉さは味はへぬかも知れぬが本當に面白い句が生れる。今こゝに先輩の句を引いて見るこ次の如き數句がある。

廣重の海はかき餅干したやう
海の中から見る雀の眞ッ畫間
畦草をなびかせてゐる風の波
おしきりの波が岸返届きかね
大の字に浮いた蛙は平和なり
音も無く春雨庭の木を濡らし
取引所のやうに雀は喋りたて

これビール軽い心にしておくれ
 國を出てこぼろぎを聴く臺所
 生活のせはしい足たのけ子猫
 秋の暮寺は安氣な鐘をつき
 はかなさはつもりを當てにきく女
 馬もまた主人の汗を知つて居り
 何にがなんでもあんまりだミ蛙のび
 ねゑ燕已らの言傳いふミ呉れ

○ 關本雅函

立話じたばたさして蚊を拂ひ
 昇給へ矢つ張り物價追ふて來る
 眞直ぐミ歸りやなぎミ小煩さし
 巡禮は奥までミほる聲を出し
 男子志を立てゝ家出する
 出帆に三方の山響き合ひ

○ 岩崎柳路

バラックに寝かすに惜しい可愛い子
 郵便局へ旦那が行つて腹を立て

◆ なかくの暑さですが讀者の皆様にはお變りはありませんか。四月から五月にかけて同人の一家は病魔のために随分悩まされましたが、ほつくよくなつて今では誰一人病氣のために閉ぢこもつて居るものもなくなりました。

◆ 今度松本助六氏が同人に復活して呉れましたからお知らせいたします。同時に平野郷へ第十三支部を設けました。これから同氏の盡力で平野郷でも句會が開かれますから最寄の作家は同支部に加入して大いに奮つて下さい。

◆ それから恩妻の葎乃が同人になりました。これは編輯部で働いて呉れることになりました。近作柳橋欄へ葎乃女の名で投句してゐましたから御存じの方もありません。一寸紹介いたしておきます。

◆ 次に石井風人、黒田佳扇の兩氏が一身上の御都合で同人を辭され支部員にな

切手貼る娘のダイヤ光つてゐる
 親且那背より高い金庫据わ
 閉會後幹事折詰二つ提け
 今更に元は三助も云へず
 帽子に文子掛けの標札もある麴町

宮内一洲

物の干へ煙の出来た二階借
 欄干にもたれ外見ると年になり
 蛇の目傘考へた末荷が除り
 口紅が雨でなければなき云ひ
 なみくさつがれる迄を考へる
 途中下車團體さいふ強味なり

高橋かほる

内氣な子粘土細工でほめられる
 舞の手を槍持少し知つてさう
 鎗持は毛脛を派手に見せて行き
 出来過ぎたお爛に短氣あらはれる
 針供養みんなほつてりした娘
 寝煙草に枕は邪魔なものにされ
 避暑に來た其夜流れの音を聞き

られました。甚だ遺憾に思ひますが萬止
 むを得ない御事情だと思ひますので袂を
 分つこころになりました。復活の日の遠く
 ないことを望みます。

◆太田一聲氏は石井風人氏のあみを襲
 ふて第六支部の幹事になりました。な
 ほ同氏夫人は六月下旬に一聲氏の第二世
 を擧げられました。

◆六月廿三日に突然別稿の通りに新和
 歌の浦へ吟行をいたしました。幹事の
 一聲氏の顔が見へなかつたため、同氏
 の案内が徹底的に行き渡つてゐなかつた
 ため、頗る變天古な會合で終始いたし
 ました。高橋かほる氏から案内がなかつ
 たので怪しからぬさいふ抗議、そして怪
 談めいた凄文句を並べた葉書が舞ひ込ん
 だので僕は幹事ではなかつたが鬼に角幽
 靈會の責任者として平あやまりにあやま
 り、もう一度吟行のやり直しをやるさい
 ふ條件つきで漸く解決をいたしました。
 ◆吟行について曾山氏に色々御手数を

折檻の首を流連聞かされる
松本助六

○ ハンモック座敷へ吊るも初の子
冷蔵庫漏つてる様な水が垂り
暇乞ひ父親の知らぬ金を持ち
紙狭みこの清書を見附けられ
首巻を床屋にミらす程寒く
炭俵深くなつたに大儀さう
陰氣な日鶏少し早く寝る
○ 近道人殖わて今の話しが話せない
森田輝翠

詰められた方も笑つて駒を投
東西屋合ひの手まで笑はせる
○ 附添ひは恐れた氣味で寫つて
伯母の眼を邪魔扱ひにする娘
白粥が来たので外す水枕
○ ピンセット活字を植る音をた
泣きました顔で出て来る幼稚園
○ 振向けば君も小さい並木路
乃

かけました。同行者一同に代つて御禮を
申します。

◆本號に發表する筈の近藤鉛坊氏選
『年増』は選稿がまだ戻りませぬので發
表することが出来ませんでした。今暫ら
くお待ち願ひます。

◆朝鮮の石井竹馬氏は本誌の使命ミす
る川柳を社會に弘く宣傳すること、初
心者を指導すること、研究的作品の發表
につこめることに對して非常に好意を寄
せられ、同氏の通信用葉書へ本誌の宣傳
文字を印刷され川柳家以外の友人へ購讀
をすゝめて下さることになった。私達は
同氏の好意に對して大いに意を強くして
ゐる。

◆『センリウトウヤスムイサイフミ』
ミいふ電報が編輯室へ舞ひ込む。誰かミ
見れば北海の重鎮龜井花童子氏だ。

◆突如上京した溪花坊氏から「公園へ
散歩にゆく程の心さ浴衣一枚がけて來た
ので今度は訪問も柳書蒐集にも出ませぬ

晩酌の膝を飼猫に見逃さず
 故郷へ来てなつかしい瓜のかざ
 籠の鳥諦めたのか空を見ず
 帝王の氣持ちで上戸何か呉れ

太田徹底郎

十燭で餘所の錦紗が縫ひ上り
 この意味をうち明かしたい贈物
 和服でも出社の出来る金を持ち
 看護婦へ血縁さいふ心づけ
 よろこびさいふに水引しまりすぎ
 翌る朝見れば螢は虫であり
 手が鳴るに女將銅壺の火をせり
 氷囊を仕替へる外を夜警往き

吉川啞人

缺勤極めた男に雨が降り
 お土産に子供同志の不平等也
 宿直は女の抽斗あけて見る
 引受けた女將に貰ひきかぬ也
 カツフェーで休みき聞いて氣を落し
 待つてゐるやうに鐵瓶吹いてる
 日曜日菊の手入で晝さなり

併し昨日文化村の柳櫓寺の本坊を訪問して来ました。大和尚からよろしく云つてもらいました」云々。

◆前號正誤 六頁相紋元太は相元紋太の誤り、一頁の「遠足」に「ぞんざいな」の二句は義矢滿氏の句でないこのこゝ、作者は通知して下さい。二頁の「段梯子子供供でに上つて來」は「段梯子子供供でに上つた氣」の誤りだそうです。作者松郎氏からの知らせがありました。

一〇頁の「二次會の自慢話も氣に入らず」は雲川氏の作でなく薫流氏の作だこのこゝ同氏から通知がありました。九頁の「摘み草に來るに新しい家が見ゆ」は薫流氏の句でなく、かほる氏の句であるこゝ同氏から通知。

▼武笠氏著の「誹風柳樽通釋」に拙者「川柳ふみころ手」は本社でお取次(前金)いたします分に限り一割値引いたします但雜誌と別會計につき誌代流用はおこまり。(路)

死會

◆新和歌の浦吟行◆

路 啞 古 二 松 硯
 郎 人 城 柳 雨 豆 水

南海食堂へ寄つてビールを飲んでゐる時だつた。新和歌の浦行の相談が持ちあがつた。ビールの勢ひで「何處へでも行で」ミすぐに話はましまつた。幹事は勿論發聲者の一聲クンだつた。

その朝になつて「莢豆サンが来てはります」ミ言つて起されたので「何んで莢豆クンがこんなに早くから来たんだらうい、句が出来たので一ト晩寝られなかつ

たのか知らん」ミ思ひ乍ら起て見た。莢豆クンの雨衣を見て「さう〜今日は新和歌行きだつたね。スツカリ忘れてゐた妻が起してくれる約束だつたが」ミ聞いて見るミ、妻も「黒木サンが何で來やつたかと思ひました」ミいふ暢氣さ加減にあきれながらも直ちに出勤の準備をする。ミ云つた處で洋服を着てポケットへコダツクを投り込んでそれでしまひだ。雨が今にも來さうだが晴れさうにもあるそこで大膽に白靴で出かけた。四ツ橋の電車で二柳子クンミ出遇ふ。南海へ行つて見たが誰も來てゐない。第一幹事の一聲クンの姿が何處にも見當らぬ。これから暫くのいきさつは端し折つて鬼にも角にも和歌山行の淡輪號の食堂におさまつてビールをあほつてゐるうちに一行七人は和歌山驛へほり上げられてしまつた折角和歌山へ來たんだから久樂クンを訪ねやうこいふこゝになつて南汀町までブラ〜出掛けた。

久樂クンはあまりの突然に全く驚いてゐた。女關先で辭して虎伏山竹垣城の天手閣へおしあがつた。體を吹き飛ばしうな風が吹いてゐる。そこで「石垣」を課した。披講の聲は遙かに脚下の和歌山市民の耳をおごろかしたかも知れぬ。

石垣のまごへ散つてく竹の皮路 郎
 石垣へ暮六つの鐘つきあたり 同
 石垣へ爆投げつける程に酔ひ 同
 石垣のある家の子が大學出 同
 人垣へさき泳いだシャツを干し 古城山
 石垣で忍術をする男の子 同
 名城を聞き石垣を叩くなり 同
 石垣の下は泳げる療病院 同
 石垣の方から子供あがるなり 啞人
 石垣は大丈夫さいふ構へなり 同
 石垣の片つ方だけ風が吹き 二柳子
 石垣もさびて昔をほめるなり 松雨
 石垣の風に昔を語るなり 莢豆
 石垣のあんな處に花が咲き 硯水
 こで記念攝影をなし直ちに新和歌に向つた。(以下記事略、六月二)

キリンビールの一杯は

人生を愉快にいたします

晩酌に宴會に御愛飲を!!

東區平野町四丁目

明治屋大阪支店

早幕にビールをついだ好い娘	一	秋坊
立飲みの荷物ビールに重た過ぎ	零	骨
拍手の方へキリンビールの栓が飛び	同	
乾杯の主はカッブに取りまかれ	同	

▼大阪一流の古本屋です。どんな本でもあります。

▼商賣にかけては掛引がありませんから安心です。

▼新刊でも割引して呉れます。これは読書家の便宜の爲。

▼主人公藤堂氏は本の蟲の心持をよく知つた人です。

▼だからいろんな話をしながら愉快に本が見られます。

▼道頓堀邊を御散歩のせつは是非立寄つてあげてください。

——路郎生——

古

本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話南 五 六 二 番

武笠山椒氏著（緒崎英朋畫伯裝釘）

誹風柳樽通釋

全一冊
四六判總布美裝
正價金參圓
送料金拾錢
第二編近刊

最新刊一大快著

（三一八）國の母生れた文を抱あるき

江戸へ嫁にやつた娘が妊娠したと聞いて、國の母の心配は一通りで無かつた。それ文に、安産の通知があつた時の喜は又一入である。通知の手紙を、彼方へも此方へも持ち廻つて、抑へきれない喜をこぼして歩いてゐる。「生れた文」川柳子獨得の言ひまはし。

川柳は寸鐵殺人的の警句で人情の機微世態の真相を穿ち、短い十七文字の中に、笑ふべき、泣くべき、驚くべき、嘆くべき、社會萬般の事相を盛る。誠に我が國の詩の粹である。此の川柳の寶典誹風柳樽の初篇を、著者獨得の輕妙の筆で、こくめに片端から一句も漏さず解釋を施したのが即ち本書。ピアード博士曰く「復興の第一義は笑の提供である」と。本書は正に其の笑の提供者である。又隨處に描んだ五十有餘の畫が興味を豊かにするのは云ふまでも無い。

振替 東京一七四八

有朋堂書店

東京市神田區錦町一丁目

麻生路郎氏著（柴谷柴舟氏畫）

漫畫 漫文 川柳ふところろ手

四六版 二百餘頁

定價 金壹圓廿錢

送費 金八錢

これは川柳懷手の改訂版です。懷手は川柳家以外の人達にまで面白がられて直ぐに賣切れてしまったのです。「懷手」はもう出ないのですかよくきかれるので今度田村書店から出すことになりました。本

屋の方からの希望もあり漫講川柳ふところろ手漫文といふ長い名になりました。そして装幀もすつかりあらたまり、

四六版になりました。是非御一讀を煩はします。（著者）

發行所

大阪市東區北久太郎町四丁目

田村書店

電話 船場二〇一二番

取次

兵庫縣武庫郡鳴尾

川柳雜誌社

振替 大阪三一五二四番

投稿規定

▼句稿は別紙に認め、住所氏名を明記するこゝに。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」ミ封筒に朱記するこゝに。

▼締切は厳守されたし。

▼各地會報は清記のこゝに。

▼用紙は半紙又は同型の野紙に限る。

▼投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入のこゝに。

募 集

第一卷第八號課題

七月廿五日締切

(各題二十句以内)

▲臺所

淺井五葉選

▲子猫

伊東夜乃郎選

▲白粉

高橋古城山共選
龜井花童子

第一卷第九號課題

八月二十五日締切

(各題二十句以内)

▲氷枕

石井竹馬選

▲燕

白石維想樓選

▲半襟

柳川洲馬共選
竹田芦蘊

每 號 募 集

▲近作柳樽(句數無制限) 麻生路郎選

▲各地柳壇(會報)編輯 局選

▲文章(評論研究吟行漫文)

價 定

一 部	參 拾 錢
六 部	壹 圓 六 拾 錢
十二部	參 圓 (共稅郵)

料 告 廣

特等	一頁	參 拾 圓
普通	一頁	拾 圓
同半	一頁	五 圓
五號	一行	壹 圓
參 伍	拾 拾	圓 圓

▼御送金は齋書口座内阪三一五一四番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直ちに御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てます其の場合には御不在中であらうに願ひます但集金郵便には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりぞ御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は箇人宛にしない事

大正十三年七月十日印刷

大正十三年七月十五日發行

第一卷第六號
(毎月一回十五日發行)

編輯兼發行印刷人 麻生 幸 二 郎
兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地

大阪市東區農人町二丁目七番地

印刷所 藤本兄弟社

兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地

發行所 川柳雜誌社

振替大阪三一五一四番

賣 店

(大阪)	明文堂	エミヤ	波屋	百足屋	田村	公立社
(東京)	東條	(京都)	三宅	(神戸)	米田	
(金澤)	石井	(函館)	石塚			

川柳雜誌社同人 (いろは順)

主幹 麻生路郎

關本雅幽	宮内一洲	麻生葎乃	松本助六	黒木莢豆	武田彩霞	高橋古城山	太田徹底郎	吉川啞人	西垣松雨	岩崎柳路
	森田輝翠	酒井零骨	小泉飛水	柳川洲馬	宗清夜調	竹田蘆穂	高橋かほる	太田一聲	龜井花童子	橋本二柳子

支部所在地

第一支部 大阪市西區八條通南小路

幹事 橋本二柳子

第二支部 大阪市外天下茶屋南下ノ森三五〇

幹事 森田輝翠

第三支部 大阪市外濱寺町羽衣二六一

幹事 酒井零骨

第四支部 大阪市西區鶴町四丁目十三號地嵐山方

幹事 關本雅幽

第五支部 大阪市北區西野田茶園町七九四

幹事 小泉飛水

第六支部 兵庫縣武庫郡西灘村河原東五九〇

幹事 太田一聲

第七支部 大阪市外南濱一八二

幹事 西垣松雨

第八支部 神戸市旭通二丁目八三

幹事 宮内一洲

第九支部 山口縣山口町石原小路

幹事 柳川洲馬

第十支部 神戸市中山手通二丁目九五

幹事 武田彩霞

第十一支部 東京芝區愛宕町一ノ一六大成社内

幹事 岩崎柳路

第十二支部 函館市青柳町五〇

幹事 龜井花童子

第十三支部 大阪市外平野郷梅ヶ枝町五丁目

幹事 松本助六

本社幹事

(會計)一聲(廣告)莢豆(寫真)

さじ睦るあに上卓スーソ車羽



第一 用信

大坂九郎右衛門町
中野商會
電話南二一九三

羽車ソース

從來のソースに御
満足の出来ぬ方は
是非御風味を!!
食堂に 御家庭に

りあに店品料食國全

定價 三拾錢

大正十三年三月三日第三種郵便物認可(毎月一圓十五日發行)
大正十三年七月十日印刷
大正十三年七月十五日發行